

教育者・研究者・舞台人・日本文化のよき理解者としての ジョンソン先生の思い出

和田 葉子

来日されて今年で丁度 35 年、関西大学で教鞭をとられてから 34 年が経つ。着任されて間もないジョンソン先生には大学院で演劇について教えていただいた。青いジーンズのよく似合う先生だった。当時、日本では、まだ大学の教員がジーパン姿で授業をするなど考えられなかった時代だった。アメリカではインディアナ大学とウェイン州立大学でスピーチと演劇を専攻され、学生時代には、劇団員がいくつかの決まった演目を交互に上演するいわゆる「レパトリー劇場」の舞台に立ち、俳優としても多くの経験を積んだ。毎週、異なる作品に出演しなければならないこともあり、セリフを覚えるのがたいへんだったとか。その経歴のためか、私の受講した演劇の授業中に、突然、サンダルを脱ぐや、机の上にひらりと飛び乗り、実際に演じて見せてくれたことがあったのを覚えている。アメリカではラジオにもレギュラー出演されており、番組で文学作品についてわかりやすく解説する DJ もされていた。

来日後も舞台は続けておられ、私も 1 度、観に行かせていただいたことがある。その時の出し物は、1969 年ノーベル文学賞を受賞したサミュエル・ベケット（1906 年アイルランドに生まれ、1989 年パリで亡くなった）の戯曲『クラブの最後のテープ』だった。不条理の、しかも一人芝居の作品であり、昔録音した自分の声をテープで聴く老人、クラブという難しい役を見事に好演された。また、能楽にも大いに関心を示され、謡をご自身でなさるだけでなく、能の演出技術の研究もされた。

現在の国際部の前身ともいえる国際交流センターでは、所長代理として 10 年以上、国際交流事業の推進に大いに貢献された。特に、関西大学が複数の海外の大学と協定を結び、語学研修プログラムや研究者交流のシステムを作り上げるまでの、ジョンソン所長代理のご苦労はたいへんなものであった。私は、それを何年にもわたり、一人の国際交流委員としてそばで見てきたのでよく知っている。しかし、国際交流センターでは、山と積まれた仕事をいつも笑顔で引き受け、こなしておられた。

ご専門は、演劇とスピーチの他、幕末・明治期に活躍したユニークな絵師、河鍋曉斎（かわなべ・きょうさい）（1831 年～1889 年）について造詣が深く、業績には、ヴィクトリア朝の『イソップ物語』と明治時代の『通俗伊蘇普物語』の比較研究などがある。また、東京美術学校

(現在の東京藝術大学)の設立に大きく尽力した美術史家、岡倉天心(1863年～1913年)とアメリカ人の東洋美術研究家、アーネスト・フェノロサ(1853年～1908年)に関する研究もされており、現在、出版に向けて仕事を進めておられるとのことである。これまでの研究成果は出版物に加え、ロンドンの大英図書館での記念講演やロンドン大学東洋アフリカ学院での招待講演等で広く国際的に発表されている。

長い間、私の先生として、そして、やがて同僚として一緒にさせていただくことができたことをたいへん光栄に思っている。ウィットに富み、困難な時期でも常に微笑を絶やさなかったジョンソン先生のご健康を心より祈っている。まもなくキャンパスでお会いできなくなることは寂しいけれど、これからも、ご活躍され、日本の優れた文化や芸術家を国内外に知らしめる良いお仕事を精力的に続けられると確信している。

ジョンソン先生、私達、本当にお世話になりました。有難うございました。

2010年 クリスマス